

《しかし・つまり》

【練習問題①】次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

さらに天空の観察は人類に心の内の想像力という能力に気づかせ、その働きを飛躍的に発展させることを教えたであろう。ちなみにここでのいう想像力とは夢想や幻想の力ではなく、あらゆる現実についてそれを認識の対象として統一する能力をさしている。外から与えられる無数の感覚刺激を形にまとめ、それに個物としての名前を与える準備をする力を意味している。たとえば球体を見てそれを丸い輪郭線で描いたとすると、球面上にはそんな輪郭線などどこにもないのだから、これは見る人の想像力の産物だということになる。その意味で、想像力は人間があらゆる現実を認識するための基礎的な能力なのである。

問 傍線部の「想像力という能力」とありますが、筆者はこれをどのような能力と考えていますか。最も適切なものを、次から選び、記号で答えなさい。

- ア あらゆる現実について、言葉で表現すると同時に、外界からの無数の感覚刺激を基に、夢想したり幻想したりする能力。
- イ あらゆる現実について、言葉で表現する前段階で、外界からの無数の感覚刺激を認識の対象として一つにまとめる能力。
- ウ あらゆる現実について、言葉で表現した後、外界からの無数の感覚刺激を的確に表現し得たかどうか分析する能力。
- エ あらゆる現実について、言葉で表現した上で、外界からの無数の感覚刺激をどの程度まで統合できたか検証する能力。

答え

☐

覚えておくこと

つまり↓

しかし↓

【練習問題②】次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本は木の文化の国、ヨーロッパは石の文化の国、とよくいわれる。本当であらうか。確かに、最近わが国でも鉄筋コンクリート造りのほか、不燃性の耐火住宅が建てられるようになってはきたが、大半の家は木造である。これに対してヨーロッパの住宅は、コンクリート造り、ないしは石造りが大半である。

しかし、例えば北欧の木製家具は、その優れたデザイン感覚によって、わが国でも人気が高い。そしてその木製家具をルイ王朝（フランスの王朝名）時代のような年代物であればあるほど、ヨーロッパ人は珍重（ちんちょう）し、大切に使う。

このような、木を大切にする心は、家屋（かおく）にもあらわれている。もっとも普通の都市の家屋はコンクリート造りのアパートであり、より高級なのが郊外の一戸建てに見られるような伝統的な石造りであり、そして最高にぜいたくなのが木組みの家なのである。

つまり、ヨーロッパの石の文化の背後には、やはり木の文化が横たわっている。それが石で表現せざるを得なかったのは、地続きの土地柄から生じる激しい防衛本能の結果であったといえよう。

問 筆者の言いたいこととして最も適切なものを次の中から選びなさい。

ア 石を好むヨーロッパ人は、石造りの家を数多く建ててきた。

イ ヨーロッパの家具は非常にデザイン感覚が優れている。

ウ 木を大切にするヨーロッパ人は、高級な木組みの家を郊外に建てたがる。

エ 石造りの家が多いヨーロッパにも、木の文化が横たわっている。

答え

☐

【練習問題③】次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

資本主義がイギリスで成立するときに、やはり倫理的な問題が指摘された。まさに「金があれば何でもできる」と思うような人間が出てこないようにするにはどうしたらいいかという議論があったのです。つまり、「何のために儲けるのか？」を考えたのです。金があれば何でも買えるからそのために儲ける、というのではなかったのです。儲けて、その金で何をしたいのかを問うたわけです。これは結局、何のためにわれわれは意識的に地球にあるものを消費して生活する世界をつくったのか、を考えようとしたということです。

（中略）

それはわれわれが、宇宙の歴史、地球の歴史、生命の歴史、人類の歴史：これらをかなり解読できたということです。いまわれわれが持っている知の体系のほとんどは、二十世紀に解読された部分です。なぜそれが可能だったのかといえば、やはり豊かになったということが大きいのです。

したがって、なぜ豊かになるのかには目的があって、儲けるのはその手段にすぎないということです。金があれば何でも買えるから金を儲けるというのが目的ではありません。金儲けには必ず倫理的な歯止めがあり、やってはいけないこともあるのです。

問 筆者の言いたいことを次から選び、記号で答えなさい。

ア 資本主義のゴールは、文化や学術の発展に求めるのではなく、衣食が足りて豊かになることに求めるべきである。

イ 資本主義では、何のために儲けるのかをきちんと考え、やってはいけないことがあることを自覚しておく必要がある。

ウ 資本主義は金儲けをする人が悪用するためのシステムなので、倫理的には廃止したほうがよい。

エ 資本主義によって、人間の欲望が解放されればより豊かになるので、どんどん金儲けをすることはよいことだ。

答え

☐

【練習問題④】次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

草食であろうと肉食であろうと雑食であろうと、動物は、植物たちがつくった栄養物を食べて生きています。植物たちが、自分の栄養を、自分でつくりだしていることや、「動物は、植物的な生き方をするものを食べている」ことを理解すると、よく理解した人ほど、間違ってしまう質問があります。

それは、「地球上にはじめて生まれた生物は、『動物的な生き方』をするものか、『植物的な生き方』をするものか」という質問です。生物が地球上にはじめて生まれたときには、他の生物はいません。ですから、最初の生物は、他の生物のつくった栄養物を食べることはできません。

そのため、「地球上にはじめて生まれた生物は、動物的な生き方をするにはできない」と考えられます。とすると、その質問に対する答えは、「地球上にはじめて生まれた生物は、植物的な生き方をする生物でなければならない」ということになります。

ところが、地球上にはじめて生まれたのは、自分で栄養をつくらない、「動物的な生き方」をする生き物だったのです。その答えを知ると、当然のように浮かぶ疑問があります。むしろ、浮かばなくてはおかしい疑問です。

「はじめて生まれた生物は、何を食べて生きていたのか」というものです。その疑問に対する答えは、生物が生まれたころの海にありました。当時の海は「原始の海」とよばれて、現在の海とは、含まれている成分がずいぶん違っていたのです。原始の海があったころの「原始の地球」に思いをはせましょう。

地球は、今から約四十六億年前に誕生しました。その当時、どんな生物も存在しませんでした。それから約六億年が過ぎたおよそ四十億年前に、地球上のあらゆる生物の祖先にあたる最初の生物が誕生したのです。はじめての生物は、原始の海の中で生まれました。「何を食べて生きていたのか」と気になります。

実は、そのころの海は、「スープの海」といわれているのです。スープは、動物の肉や魚介類、野菜に含まれる栄養物を、煮だしたものです。しかし、当時の海が、そのようなものを煮だしたものでないことは明白です。煮だしに使われる動物の肉や魚介類、野菜などは、まだなかったからです。

でも、スープの海とたとえられるのにふさわしい栄養のある物質が、多く含まれていたのです。地球上にはじめて生まれた生物たちは、「スープの海」に含まれる栄養物を食べていたのです。

問 筆者の言いたいことを次から選び、記号で答えなさい。

ア 動物は、他の生き物がつくった栄養物を食べて生きていたので、その肉は植物がつくりだすものとはいえない。

イ 動物は、植物的な生き方をするものを食べているので、地球上にはじめて生まれた生物は植物的な生き方をする生き物であった。

ウ はじめて生まれた生物は、何を食べて生きていたのかという疑問に対する答えは、約四十億年も前のことなのでよく分からない。

エ 地球上にはじめて生まれたのは、動物的な生き方をする生き物で、その生物たちは当時の海の中に含まれる栄養物を食べていた。

答え

★解き方

「はじめて生まれた生物は、何を食べて生きていたのか」と文章中に

【練習問題⑤】字数びつたりだぞ！

灯台下暗し。このことわざがいつごろできたのかは分からないが、江戸時代の文学者・井原西鶴の作品には出てくる言葉なのだから、それ以前に存在していたことになる。灯台は遠くの方を照らして明るくするが、すぐ下はかえって暗いという義である。つまり、身に遠いことには明るくても、案外身に近いかえって暗いものであるということである。例えば、世間で起きていることには詳しいが、家庭内のことはさっぱりよく分からない。自分の住んでいる地域の良さを、よそから来た人によって教えられて、初めて気付く。近くのこととは分からないが、遠くのことを知っているということである。これもまた人生における一つの真実のようだ。

問 傍線部の「近くのこととはよく知っていると」とを説明した部分を本文中から四十字で探し、初めと終わりの三字を書き抜きなさい。

--	--	--	--	--

【練習問題⑥】次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本と西洋の庭をみてみよう。内と外との中間地点である庭にどのような自然を取り入れるのか。その方法に、両者の自然に対する意識の大きな違いがうかがえる。

自然を取り入れるといっても、庭に草木をたくさん植えたり、水を流したりして自然らしさを演出しようとするのは、むしろ西洋の方である。日本はむしろ逆だ。日本でもっとも有名な庭といえば、室町時代につくられた京都の竜安寺の石庭を思い出す人は多いだろう。石庭の名のとおり、この庭を構成しているのは石と砂である。いわゆる枯山水とよばれるものだ。枯山水は、石と砂だけで、山のつらなる様や、滝や河の流れを表現する。そこでは植物はかえってじゃまであり、極力排除される。

それに対して西洋の庭は花が中心だ。色とりどりの、なるべく珍しい花がたくさん咲いているほど美しい庭とされる。西洋の庭の楽しみは、花を見ることといってもいい。ガーデニングとは、基本的には季節によって木を植え替えたり、さまざまな花を咲かせたりすることである。

しかし、そうだとすると植物をたくさん植えている西洋の庭の方が、自然を豊かに取り入れているような気がする。だが、そこに西洋と日本の自然観の大きな違いがある。西洋の庭に植えられている草花は枯れれば取り替えられる。つまり自然は交換可能な物として扱われる。いいかえれば、そこでは見えているものがすべてである。

問 傍線部の「両者の自然に対する意識の大きな違い」とあるが、これとほぼ同じ意味の部分本文から十五字以内で探し、初めと終わりの三字を書きなさい。

--	--	--

、

--	--	--

【練習問題⑦】次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

例えば、何か突破の事件が起こったとする。その渦中の人は、あまりのことに、あれもこれもいろいろなことが一時殺到する。頭の中へどんどんいろんなことが入ってきて、混乱状態におちいる。^{*茫然自失、どうしていいかわからなくなる。}これが「忙しい」のである。「忙」の字は心(りっしんべん)を亡くしていると書く。忙しいと頭が働かなくなってしまう。頭を忙しくしてはいけない。がらくたいっぱいの倉庫は困る。平常の生活で、頭が忙しくてはいけない。人間は、自然に、頭の中を整理して、忙しくならないようになっていく。睡眠である。

眠ってからしばらくすると、レム睡眠(浅い眠り)で、脳は起きているのに近い状態にある)というものが始まる。このレムの間に、頭はその日にあったことを整理している。頭に入れるべきこと、すなわち記憶しておくべきものと、処分してしまつてよいこと、つまり忘れるものとの区分けが行われる。^{*自然忘却である。}

朝、目を覚まして、気分爽快であるのは、夜の間に、頭の中が整理されて、広々しているからである。何かの事情で、それを妨げられると、寝覚めが悪く、頭が重い。

^{**}茫然自失…あつけにとられて、我を忘れてしまうさま。

^{**}忘却…すっかり忘れてしまうこと。忘れ去ること。

問 傍線部の「夜の間に、頭の中が整理されて」とあるが、睡眠中に行われる「整理」とはどのようなものか。「く区分け」という語句で終わるように、二十五字以内で書きなさい。

あるので、その答えが、筆者が述べようとしていることである。

【練習問題⑧】次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

一見矛盾することばを結びつけて、一面の真理を伝えるのを修辞学でオキシモロンという。日本語では、[＊]撞着語法と呼ばれる。例えば、こういうものがある。

① 公然の秘密

② 負けるが勝ち

秘密は周知でないからこそ秘密である。みんなが知っていたら秘密でも何でもないはず。ところが、秘密だというからよけいに好奇心をそそる。またたく間に広がり、知らぬものもないが、建前はあくまで秘密となっている。そういうことがよくある。

負けるが勝ち。どうして負けるが勝ちになるのか。負けた時点ではそれがそのまま勝ちになることはない。それなら矛盾である。つまり、その場では負けたけれども、長い目で見れば結局自分の得になるという時、負けを勝ちと見なせるものだから、「負けるが勝ち」なのである。時として、敗者の負け惜しみに利用されることがないとは言えないが、無理に勝負にこだわらず相手に勝ちをゆずることが実際においても高く評価される。負けると勝つが同一次元でないから、この矛盾のように見える命題が矛盾でなくなる。

オキシモロンには論理の飛躍がある。そのすき間を飛び越えられない人には、何のことを言っているのかわからないだろうし、逆に飛び越えられる人には、何とも言えない面白さと感じられる。つまり、撞着語法はかなりシヤシヤしたものなのである。それが日常生活で何気なく古くから使われてきたというのは、興味深いことである。大人の言葉である。子どもには通じない理屈である。

[＊]修辞…言葉を美しく巧みに用いて効果的に表現すること。また、その技術。

[＊]撞着…通常は互いに矛盾していると考えられる複数の表現を含むこと。

問 傍線部の「負けるが勝ち」とあるが、筆者の考える「負けるが勝ち」とはどういうものかを、**四十字以上四十五字以内**で書きなさい。

【ハイレベル①】次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

伝統的社会と呼ばれるような社会に生きている人々は、自分の存在を独立したものと考えず、むしろ、多くのものからいのちを受け継ぎ、そして別のものに渡してゆく媒介的なものと考える傾向がある。自分が現在生きているのは、直接自分を産み育ててくれた父や母の存在があったからだけではなく、さらに父母を産み育てたそれぞれの父や母がいたからだと考えて、自己の存在を幾世代にもさかのぼった遠い先祖と結びつけて認識している。それが一般に祖先崇拝すうはいと呼ばれるものである。しかし、現代社会では、なかなか祖先崇拝すうはいを感じることは難しい。

大分県のある村の人々は、今咲いている桜を見て、それを植えてくれた亡き祖母を思うことができるし、一方また自分が植えた苗木が数十年後に枝を広げたくさんの花をつける様子を思い描くことで、未だ見ることもない子孫の存在を確かなものとして認める。次々と受け継がれるいのちへの畏敬の念であり、それを表現しようとする意志である。

しかし、急速に変化してゆく社会に生きている私たちは、日常生活の中で、自分の存在が限りなくさかのぼることのできる数多くの先祖の存在によってもたらされるものであることを、理屈の上では分かっているにもかかわらず、自分が困難である。自分たちの行いが、自分のいのちをつなぐ子や孫、ひ孫たちの生活にどのような影響を与えるのかを、生き生きと想像することができないのである。

問 傍線部の「現代社会では、なかなか祖先崇拝を感じることは難しい」とあるが、それはどのようなことかを「日常」「存在」の二語を用いて、五十文字以上六十文字以内で書きなさい。
社会が急速に変化する中で生きている私たちは、

が困難であるということ。

【ハイレベル②】次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

日本全国どこのお店でも、さっと暗算でお釣りを出してくれる人がいます。これはすごいことなのです。

それができるのも、みんな小学校と中学校は義務教育にして、きちんと勉強をしたからです。日本の経済が大きく発展したのも、全国に、こういう人たちがいたからなのです。

つまり、世の中の人が、みんな基本的に勉強することで国は発展します。読み書きや計算ができれば就職もしやすくなり、仕事がなくて犯罪に走るという人も減り、社会は安定します。

そこで、国民の税金を使い、全国のみんなが小学校と中学校に行く費用は無料にして、勉強できるようにしているのです。あなたが小学校や中学校で勉強をするための学校の建設費や先生の給料、教科書代は、みんな税金でまかなわれています。

子どもたちの学校の費用を、学校に行っていない人が納めた税金からも出しているのは、社会全体のためになるからです。

問 傍線部の「国民の税金を使い、全国のみんなが小学校と中学校に行く費用は無料にして、勉強できるようにしている」とあるが、その理由を、「発展」「安定」という言葉を使って四十字以上五十字以内で書きなさい。

【ハイレベル③】挑戦！明治大学の入試現代文

一九九六年に打ち上げられたNASAの探査衛星マーズ・グローバル・サーベイヤーが火星に最接近し、その表面の鮮明な画像を伝えた。そこには複雑で、奇妙な起伏が広がっていた。それをじっと眺めていると、そこには実にたくさんの人工的な意匠が隠されていることに気づく。ゴリラに似た横顔、ぬりかべ、マスクをかぶった怪人、はたまたオバQまで。実に様々な顔が潜んでいる・・。(中略)

私たちは、本来、ランダムなはずのものの中にパターンを見出す。いや、見出さずにはいられない。顔は、火星の、あるいは岩壁の表面にあるのではない。私たちの認識の内側にある。(中略)

かつて私は、私の本の若い読者からこんな質問を受けたことがある。なぜ勉強しなければならないのですか、と。そのとき、私は十分答えることができなかった。もちろん今でも十分に答えることはできない。しかし、勉強しなければならぬ理由について、少なくとも次のようにいうことはできるだろう。

連続して変化する色のグラデーションを見ると、私たちはその中に不連続な、存在しないはずの境界を見てしまう。逆に不連続な点と線があると、私たちはそれをつないで連続した図像を作ってしまう。全く偶然の結果なのに、そこに特別なパターンを見えてしまう空目をヒトは持っている。全てが空目である。つまり、私たちは、本当は無関係なことがらに、無理に因果関係を付与してしまう。それでしか、ものを見ることができないのだ。

なぜだろう。連続を分節し、ことさら境界を強調し、不足を補ってみることで、生きる上で有利に働くと感じられたからか。もともとランダム(法則性や規則性がないこと)に推移する自然現象に無理にでも関連づけることが安心につながったからか。世界を図式化し単純化することが、分かることだと思えたからか。家族の中で病人が出たら、「ご先祖様のたたりか」と感じて、急いでお墓参りをし、安心を得ようとするのは、まさにこのことである。

かつて私たちが身に付けた知覚と認識の水路はしっかりと私たちの内部に残っている。しかしこのような水路は、本当に生存に有利で、本当に安心を与え、世界に対する本当の理解をもたらしたのだろうか。ヒトの眼が切り取った「部分」は人工的であり、ヒトの認識が見出した「関係」の多くは妄想でしかない。

私たちは見ようと思うものしか見ることができない。そして見たいと思っ

ていることも、ある意味で全てが空目なのである。私たちは世界の全体を一挙に見ることはできない。しかし、大切なのはそのことに対して、深く自分の言動を反省する姿勢である。

滑らかに見えるものは、実は毛羽立っている。毛羽立って見えるものは、実は限りなく滑らかだ。そのリアルのありようを知るために、私たちは勉強しなければならぬ。

(問題の作成上、一部改あり)

*空目：全く偶然な結果にもかかわらず、そこに特別なパターンが見えてしまうこと。

問 傍線部の「ある意味で全てが空目なのである」とあるが、それはどのような意味かを五十字以上六十字以内で書きなさい。

【ハイレベル④】挑戦！三重大学の入試現代文

考えてみると、私たちはなんとまあ数え切れないほどたくさんものの中に囲まれて生活していることか。

私が身に付けているものだけでも、洋服、セーター、ネクタイ、ワイシャツ、靴下に始まって、メガネ、腕時計、バンドなど、十指だけでは数え切れない。

この調子で、人間が作り出し、利用している製品の種類を考えてみると、見当もつかないほど多岐にわたっていることが分かる。名前が付いているのは、ものだけではない。物体の動き、人間の動作に始まって、心の動きなどという、微妙なことにも、いちいちそれを表すことばがある。事物の性質にも、いや事物と事物の関係にさえ、それを表すことばが対応しているのだ。

こんな風に、ものとは、互いに対応しながら人間を、その細かい網目の中に押し込んでいく。名のないものはない。「森羅万象には、すべてそれを表すことばがある」。これが私たちの素朴な、そして確たる実感だろう。

「ものがあれば必ずそれを呼ぶ名としてのことばがある」という考えと、同じくらい疑いのないこととして、多くの人は「同じものが、国が違い言語が異なれば、全く違ったことばで呼ばれる」という認識を持っている。犬という動物は、日本語では「イヌ」、中国語では「狗」、英語では「dog」……といった具合に、さまざまな形のことばで呼ばれる。

私たちが学校で外国語を勉強する時や、辞書を引いて、日本語のあることばは、外国語ではなんというのかを調べる時は、この同じものが、言語が違えば別のことばで呼ばれるという、一種の信念とでもいうべき、大前提をふまえているのである。

ところが、ことばとものの関係を、詳しく専門的に扱う必要のある哲学者や言語学者の中には、このような前提について疑いを持っている人たちがいる。それは、ものという存在がまずあって、それにあたかもレッテルを貼るような具合に、ことばが付けられるのではなく、ことばが逆にものをあらしめているという見方である。

また、言語が違えば、同一のものが異なった名で呼ばれるといわれるが、名称の違いは単なるレッテルの相違にすぎないのではない。言語による名称の違いが、程度の差こそあれ、かなり違ったものを、私たちに提示していると考えられるべきなのである。私の立場を一言でいえば、「始めにことばありき」ということにつきる。ことばがものをあらしめるというのは、世界の断

片を、私たちが、ものとか性質として認識できるのは、ことばによってであり、ことばがなければ、犬も猫も区別できないはずだということである。

ことばが、このように、私たちの世界認識の手がかりであり、唯一の窓口であるならば、名称の相違はレッテルの違いにすぎないということではなく、ことばの構造やしきみが違えば、認識される対象も当然ある程度変化せざるをえないことを私たちに示していると考えなければならないのだ。なぜなら、ことばは、私たちが素材としての世界を整理して把握する時に、どの部分、どの性質に認識の焦点を置くべきかを決定するしかけにほかならないからである。

(問題の作成上、一部改あり)

問 傍線部の「ことばの構造やしきみが違えば、認識される対象も当然ある程度変化せざるをえないことを私たちに示している」とはどういうことかを三十五字以上四十字以内で書きなさい。
